2009年12月31日
大阪市立大学フランス文学会編
リュテス 第37号 抜刷

CourLouisLeの語彙集について

小栗栖 等

LUTÈCE N° 37
Société de littérature française à l'Université de la Ville d'Osaka 2009

CourLouisLeの語彙集について

小栗栖 等
Hitoshi OGURISU

Yvain Lepageが1978年に刊行した*Les Rédactions en vers du Couronnement de Louis* (CourLouisLe)〈☆1〉が画期的な意味を持ったことは論をまたない．それに先立つことちょうど90年前に，Ernest Langloisが刊行した*Couronnement de Louis* (CourLouisL[1])〈☆2〉が，4系列（*A, B, C, D*）に分類される9つの写本を切り貼りし，作品の「本来の姿」を求めた点で，Lachmann校訂法の好例となり得たとするならば，Lepageの校訂本は，4系列の写本のテクストを「ありのままの姿」で提示したという点で，Bédier校訂法のいわば究極の実践であった〈☆3〉．

しかし，この校訂法論上の斬新さに加え〈☆4〉，多くの書評が指摘するもう一つの特徴がCourLouisLeにはあった．それは，浩瀚な語彙集である．筆者が参照し得た14本の書評のうち，7本までがその充実ぶりを指摘している〈☆5〉．

たしかに，同刊行本が出版された，1978年頃は，語彙集には，非常に限られた単語しか収録されないのが通例であった．全く逆の傾向を示したのが，19世紀末から20世紀初頭にかけてである．クレティアンの全作品語彙辞典〈☆6〉や『ロランの歌』の網羅的語彙集〈☆7〉，『狐物語』の語彙集〈☆8〉，というような，ちょっとした辞書に匹敵するものが，書物の形で刊行された．また，“S.A.T.F.”叢書に収録された，『テーブ物語』，『ルイの戴冠』(CourLouisL[1])，『トロワ物語』，『ギヨームの出家』，『薔薇物語』などには，網羅的ないし，それに近い語彙集が付されていた〈☆9〉．

しかし，1893年には，Godefroyの辞書（Gdf）〈☆10〉が完成し，1902年にはその補遺（GdfC）〈☆11〉が死後出版される．1901年にはその縮小版（GdfLex）〈☆12〉も上梓された．さらに，1947年には，Grandsaignes d' Hauteriveの辞書〈☆13〉が登場する．そして，1968年には，その辞書の改訂版が，Greimasによって刊行され，1979年にはその第二版が登場する〈☆14〉．他方で，1928年に刊行が開始されたWartbourgの語源辞典（FEW）〈☆15〉は着々と進行し，そこから派生する形で，Baldingerにより1971年に開始された古仏語の語源辞典（DEAF）〈☆16〉の編集・刊

行も進行中であった（第一巻の序文から読み取れる通り，こちらは当初速い編集進行を期待させるものであり，副産物として古仏語辞書の刊行も予告されていた）．そして，Tobler と Lommatzsch の古仏語辞典（TL）〈☆17〉が，1925年以来刊行され続けていたことも忘れてはならない．

上記のように，多様な辞書が入手可能になった，あるいは，なりつつあったことが，語彙集の貧弱化に拍車をかけたのは間違いない．近年相次いで刊行された武勲詩の校訂本には，非常に充実した語彙集が付されているものが多い．だが，それは，1970-80年頃に出版された刊行本からは，想像し難い状況だったのである〈☆18〉．そうした時代のなかで，全63頁（pp.458-520），収録語数約1500語を誇る語彙集は十分にインパクトをもつ存在であった．

とはいえ，当然のことながら，書評に見られるのは，賞賛だけではない．語彙集の批判にとりわけ多くのスペースを割いたのは，G. Roques, S. Kay, N. Andrieux の三氏である．これらの批評には的を射たものもあれば，そうでないものもある．また，書評の批判から漏れ落ちた不備——しかも，相当に根深い問題をはらんだ不備も少なくない〈☆19〉．当該語彙集の問題点を整理・解決する最も単純な方法は，改訂版を作成することであろう．そこまではしないにしても，補遺を作成するのは，幾分時期外れとはいえ，無意味なことではないと思われる．しかし，その作業は別の機会に譲り〈☆20〉，本論では，CourLouisLe の語彙集に見られる，いくつかの問題点——典型的かつ，重大な問題点を詳細に検討し，自戒をこめ，一つの結論めいたものを導きだしたいと思う．

I. 物語の解釈に関わる問題点

Au mauvés plet vueil estre au commencier ; (CourLouisLe, *A* 1492)

ここで問題になるのは，« plet (plait) » の意味である．これを，Lepage は “*affaire*” の意味だとしている．« plait » という語に関しては，鈴木覺氏の詳細な考察がある〈☆21〉．それによれば，この語は，『ストラスブールの誓い』では，“*engagement*”, “*accord*”, “*traité*”,『ロランの歌』では，“*assise*”, “*jugement*”, “*accord*” といった意味で用いられており，元来，法や裁判と深くかかわる意味を持つ．が，その一方で，“*mauvais tour*”, “*tromperie*” といった，比喩的な意味で用いられる場

合もあった．その場合，« plait » は，« mauvais » やそれに類いした形容詞を伴うこともあれば，そうでないこともある．いずれの場合にも，悪事や欺瞞を意味するのである（他方で，形容詞を伴わない « plait » が "*affaire*" , "*chose*" の意味になる場合もある）．

Lepageが « (mauvés) plet » に "*affaire*" という訳語を与えたのは，上記のような比喩的な意味での « plait » を念頭においてである．したがって，本節冒頭の引用は，「悪しき事柄（悪事）の始まりに私は居合わせたいのだ」と訳すことができる〈☆22〉．

だが，この解釈は幾分物語の流れに反している．作品の内容を少しだけ思い起こしてみよう．巡礼のためローマの地にあったギヨームのもとに，使者が駆けつける．ノルマンディー公リシャールが謀反を起こし，幼きルイ王を廃位し，自分の息子を王位に就けようとしているというのだ．それを聞いたギヨームは急遽，リシャールがルイを幽閉するトゥールの町に向かう．家来たちを急がせて，ギヨームは言う．

> Qu' il n' aient cure de chevaus espargnier :
> Qui pert roncin, il li rendra destrier :
> « Au mauvés plet vueil estre au commencier ;
> (CourLouisLe, *A* 1490-1492)
> 「馬を惜しむな．駄馬を失った者には軍馬を返してやろう ...」

「軍馬は儀杖馬の二倍，駄馬の三倍の価値がある〈☆23〉」ので，その急ぎようは相当のものである．が，すでにお気づきの通り，どれほど急いでも，彼は「悪事」の発端に居合わせることはできない．すでに謀反は始まっているからである．

問題の « plet » は，むしろ，原義に近い具体的な意味で解さなければならない．そのことを理解するには，現実のシャルルマーニュの息子であった，ルイ敬虔王が嘗めた辛酸を思い起こすとよい．833年，末息子シャルルの相続分を確保するために，既定の領土分割を変更しようとしたルイは，長子ロテールの激しい反撃に遭う．王は，臣下にも，リヨン大司教アゴバールやランスのエボンといった高位聖職者からも見捨てられた．

そこで，ロテールはスワソンのサン＝メダール修道院で総会議（assemblée générale）を招集する．ルイ敬虔王は，その場で，公に自らの非を認め，公開告解の手続きを経ることを余儀なくされたが，それは，つまるところ，皇帝職を辞するということであった．王は妻を遠ざけ，祭壇に武器を預け，告解者の身なりをして，サン＝ドニ修道院に入らねばらならなくなったのである．〈☆24〉

虚構世界の中で，リシャールがロテールと同じ手順を踏もうとしているのは明らかである．トゥールの町で行われようとしているのは，まさに「総会議」であり，ルイの命運は，その場で，決せられようとしているのである．ギヨームが兵士たちを急がせる所以である．したがって，我々のテクスト内に見いだされる « mauvés plet » は「悪事」ではなく「悪しき会議」の意味だと考えた方が良い．そして，問題の詩行は「私は悪しき会議の始まりに居合わせたいのだ」と訳すべきだと考えられるのである〈☆25〉．

さて，ロテールの野望は一年ほどで潰えてしまう運命であったが，リシャールの野望は一瞬にして打ち砕かれる．王位に着かせるはずの息子アスランが，町に乗り込んだギヨームにより，殺害されるからである．一方，陰謀の首謀者たるリシャールはと言えば，こちらは，命拾いする．「伯や公が，あまりにうるさく催促して，リシャール伯をギヨームと仲直りさせた（Tant l' ont li conte et li duc asproié Qu' il ont le conte a Guillelme apaié）〈☆26〉」からである．現在で言えば，県や地方圏の首長に相当する人々が，その場に，すなわちトゥールに居合わせたのは，もちろん，偶然ではない．彼らはリシャールが開催しようとする会議に出席するべく，トゥールに赴いていたのである．だとするならば，次の詩行の « mal plet » も「悪しき会議」と訳すことが可能かも知れない．

Li traïteur, cui Dex doint encombrier,
Qui le mal plet avoient commencié.
(CourLouisLe, *A* 1857-~~88~~)
58

会議の準備が着々と進められていた以上，「悪しき会議を始めた」という表現は文脈に反しているとまでは言えない．だが，裏切り者たちの所行は会議に還元されるものではない．ここでは，Lepage にしたがって，« plet » を "*affaire*"

と訳した方が良いように思われる（1857というLepageの参照番号は誤りだが）．したがって，本節の結論は下記の通りである（左がLepageの記述，右が小栗栖の修正案．本論内以下同様）．

PLAIT: *D* 27, 36, *D* 56, 161, *procès, jugement* ; *B* 884, 1129, *discussion, querelle* ; 1492, 1857, *affaire* ; 1773, 1810, *accord.*	PLAIT: *D* 27, 36, *D* 56, 161, *procès, jugement* ; *B* 884, 1129, *discussion, querelle* ; **1858**, *affaire* ; 1773, 1810, *accord* ; **1492** ***plaid, assises.***

II. 校訂に関わる問題点

Tote la gorge li derompi del col (CourLouisLe, 936)

実のところ，この詩行自体には，注意をひく語は何一つない．また，この詩行が*B*系列の写本のものであるにも拘らず，*A*系列写本のテクストの中に混入されているという方法論上の瑕疵も，本論においては問題とならない〈☆27〉

当面重要なのは，次の二点である．

第一に，Lepageが，次に示す*A*系列の詩行を退けてしまったこと．

Tote l' issue li derompi del cors (CourLouisLe, *A1*, *A2*, *A4* 936)〈☆28〉

第二に，« issue »という語を語彙集に収録しなかったことである（退けた詩行の語でも，重要なものは語彙集に収録すべきである）．

とはいえ，この二つの問題はおそらく一つの原因から来る．すなわち，Lepageは*A*系列の詩行が解釈不能，すなわちナンセンスだと判断してしまったようなのである．実際，その判断はLepageだけのものではない．Langloisが，すでに，問題の行を次のように修正している（LangloisがLachmann校訂法の実践者であることはすでに指摘した）．

Tote la guiche li desrompi del col, (CourLouisL[1], 935)

Langloisは*A*系列の読みを捨て，*B*系列のテクストを引くだけでは飽き足ら

ず，« gorge »を« guiche »に書き換えたのである．たしかに，Lepageが“修正案”としたB系列のテクスト，「首の喉全体を打ち砕き（Tote la gorge li derompi del col)」は，そのままでは洗練を欠いたと形容せざるをえない表現である．もちろん，Lepageには，修正を最小限に留める意図があったのだろう〈☆29〉．しかし，実のところ，A系列が提供する詩行には，そもそも，修正の必要がまったくない．A系列で使用される，« issue »という単語に，Greimasは，“*sortie, issue*”の意味しか与えていないが，TL, Gdf, FEWはいずれも別の意味を記載している．それらのいずれかを検索する労を厭わなければ，Lepageは，« issue »の意味を知り，詩行全体を正しく解釈できたのである．

– Gdf: Eissue: *Extrémité et entrailles de quelques animaux.* (3-20-a)
– TL: Issue: *Abgang, Abfälle von geschlachteten Tieren* (4-1489-32)
– FEW: Exire: *mfr. nfr. "abbatis et entrailles des animaux de boucherie" (seit 1332, Acart)* (3-296-a)

つまり，« issue »には「動物の臓物」という意味がある．我々のテクストでは，侮蔑的な意味合いをこめ，異教徒の内臓に対して，この語が用いられているのである．実際，TLは，今我々が問題としているA系列のテクストを，例文としてあげてさえいる．したがって，A系列の« Tote l' issue li derompi del cors »は，「敵の（胴）体の内臓を完全に切り裂き」と解釈すべきである．「(胴）体の（del cors)」に違和感を感じる読者もあるかも知れないが，体の一部に対して，この種の冗語的な表現がつくのは，古仏語のテクスト，とりわけ武勲詩では珍しいことではない〈☆30〉．

Qui les mamelles du corps vous esraca (*Chanson de Roland*, ms. *T*, éd. R. Mortier 4455)
Trestoz li sans del cors li est müez, (CharroiM, 1213)

なお，FEWは，« issue »が「動物の内臓」の意味で用いられるのは，1332年からとしているが，これは，現在となっては，修正を要するだろう〈☆31〉．

Issue*:	Issue: *A* 936, *entrailles* (au sens péjoratif)

III. 辞書を超えて

自らの方法論に違反した修正がテクストの改悪に帰着するという，嘆かわしい事態を，Lepageは避けることができたはずである．退けたテクストの単語を，辞書で確認しさえすればよかったからである．とはいえ，辞書を参照するだけで，全てが解決するわけではないのは，言うまでもない．最後にそうした例の一つを見ておこう．

Li Turs passe outre plus d' une arbalestree
Tout em poignant sa mace a destesee
Envers Guill' . en vint geule baee
(CourLouisLe, *B* 1070-1072)〈☆32〉

上記テクストの« a destesee »に対して，Lepageは "*à distance, d' un geste large*" という解釈を与えている．つまり，« em poignant »を« empoingner »の現在分詞としてとらえ，「槌矛（masse d' armes）を握りしめて」とし，« a destesee »を様態の副詞句としているのである．しかし，Lepageがこの表現に与える訳語は，どう考えても，文脈にあわない．「離れて」いては，槌矛では，相手に打撃が与えられないし，戦闘場面での「大きな動作で」は，いかにも緊迫感に欠ける．しかも，この二つの訳語には，共通点を見いだしがたく，« a destesee »の表す様態の具体的なイメージが全くつかめない．

実のところ，TLやGdfLexは« a destesee »を「助動詞＋過去分詞」と解し，"*zum Schlage erheben (?)*"，"*brandir*" の意味だとしている．そして，"*em poignant*" を「前置詞en＋poindreの現在分詞」ととらえ，問題の詩行を「拍車をかけながら，槌矛を振り上げた（振り回した）」と解しているのである．Gilles Roquesも，その書評の中で，TLにしたがって，ごく手短かに「desteseeは過去分詞で，この動詞は "*lever pour frapper*" を意味する」としている．しかし，TLが "*zum Schlage erheben*" の後に，疑問符を付していることを，見逃してはならない．

実際，« destesee »の正体を知るには，この語はあまりに用例が少ない．下記は，Gdfの記述である．

Desteser, *deteser*, verbe.

— *Act., abaisser, en parlant d' une arme dont on menaçait quelque' un :*

Le Turc passe outre plus d' une arbalestree,
Tout empoignant sa mace a destesee,
Envers Guillaumes en vint gueule baee.
(*Aim. de Narb.*, Richel. 24369, f° 31 v°.)

Icellui Jaquemin sailli avant en tenant un gros baston, appellé fourchier, lequel il leva et destesa pour ferir ledit exposant (1388, Arch. JJ 135, pièce 112.)

— *Neutr., décharger un coup :*

Icellui Bertant doubtant que ledit de la Lande ne detesast et frapast d' icelle massue. (1390, Arch. JJ 140, pièce 11.)

最初の用例の出典は，正確には，*Couronnement de Louis*であり，引用されているのは，今まさしく問題となっている詩行である．残る二つの用例は，古文書である．ATILFでは，Gdf/GdfCの出典一覧データベース〈☆33〉が作成されつつあるが，残念ながら問題の古文書はまだカードが作成されていない（2009年10月現在）．しかし，一つだけ確実なことがある．それは，この用例を見つけたのが，Godefroyではなく，La Curneだということである．彼の辞書（Lac）には，問題の二つの古文書の用例と，« décharger un coup »という，たった一つの語義だけが記載されている〈☆34〉．しかし，二つの用例における« desteser »の用法は，微妙に異なっている．Arch. JJ 135では，desteserの直接目的格補語である武器（« un gros baston »）が，Arch. JJ 140では，道具・手段を表す前置詞« de »の目的語となっている（« d' icelle massue »）．したがって，« desteser »には，Lacのように一つではなく，二つの語義を与える必要がある．そこで，Godefroyは，*Couronnement de Louis*の中に，自力で見つけ出した第三の用例も考慮して，第二の語義，“*abaisser ...*”を提案したのである．この« desteser »の項目を記載したGdf 第2巻は，1883年に完成しているので，LangloisがCourLouisL[1]（1888年）の語彙集に記載した下記の記述は，Gdfに基づいていると考えられる．

Destesee (desteser) 1071 *abaisser, décharger*

しかし，たった二つの用例から正確な訳語を引き出すのは至難の業である．実際，« abaisser » という語義は，GdfLex (1901年) では，修正される〈☆35〉．

DESTESER : *v. a., brandir (une arme)* || *v. n. décharger un coup*

そして，1925年に刊行が始まったTLにおいても，新しい用例は追加されなかった．それどころか，この辞書が“*zum Schlage erheben*”という語義を引き出すために利用した用例はたった一つ，*Couronnement de Louis*のものだけであった．だからこそ，その語義には疑問符が必要だったのである．以上の事情を考えれば，Roquesの断定的な (sans réserve) 口調には，疑問を感じざるを得ない．

とはいえ，Lepageの“*à distance, d' un geste large*”という訳語は，語彙論の本流から大きく外れており，こちらになにがしかの正当性を見いだすのは難しい．それにしても，Lepageは，かの奇妙な訳語をどのように引き出したのであろうか．CourLouisLeは，注釈も充実しているが，その中には，« destesee » に関する何の記述も見いだせない．実は，ここでもLepageは大型辞書を検索するのを怠ったと思われる．問題の語義は，Greimasの辞書のみに見出せるからである．では，Greimas 自身はそれをどこから「ひねり出した」のだろうか．彼が辞書を編纂する土台としたGrandsaignes d' Hauteriveの辞書には，この語の記載はない．そして，Greimasが引用した用例は*Couronnement de Louis*のものだけである．何かの不幸な手違いがあったのか，あるいは——これは，ありそうにもないが——，Greimasしか知らない別の用例が存在したのか...，これ以上の探求の手だては筆者にはない．

さて，RoquesがCourLouisLeの書評を発表したのは1979年であるが，それに先立つ4年前の1975年に，Marguerite Oswaldが，1925年以来中断していたGerbert de Montreuilの『ペルスヴァル続編』の校訂本を完成させていた〈☆36〉．この一見無関係な二つの出来事は，Oswaldの語彙集の次の記述によって結びつく．

DESTESEE : *(a —) 15567, comme une flèche, comme l'éclair (?) ; l'expression n'est relevée ni par God. ni par le T.-L., bien qu' un des exemples cités par eux s. v°* . desteser *puisse en être rapproché. Cf. le suivant.*

Destoise : *14414, ind. pr. 3 desteser, « décharger un coup », sens donné par Godefroy et, avec réserve, par le T.-L. ; ici « partir », s'appliquant à une flèche que l'on décoche.* (下線は引用者による)

お気づきの読者も多いだろう．この語はよほど呪われているらしい．Roquesとは異なり，OswaldはTLの疑問符のことは忘れなかった．が，*"décharger..."* がGdfだけの訳語であり，TLが異なった語義 *"... erheben (?)"* を与えていることは，失念してしまったのである．とはいえ，いずれの語義も，目下の用例には当てはまらない．

Plus tost que quarriax ne destoise
s'en va li vers, mais si avint
c'onques ne sot que il devint
Perchevax, dont esbahis fu ;
(ContPerc[4], 14414-14417)

ここでは，物（« quarriax »）が主語となっており，既知の三例とは明らかに異なった用法で« desteser »が用いられている．したがって，Oswaldの，大弓の矢が「飛ぶ」ないし，「放たれる」という解釈は良く文脈に合致する．となれば，これは，« desteser »の第三の用法ということになる．

一方，次の用例は，*Couronnement de Louis*のものと，一見，非常に良く似ている．

Es vous la desleal, la fole,
qui vint corant a destesee,
une hache tint entesee.
(ContPerc[4], 15566-15568)

この用例と，先ほどの第14414詩行の用法とを関連付けて考えれば，Oswaldの« a destesee »に対する，*"comme une flèche, comme l'éclair (?)"* という訳語は，一層の妥当性を持つように思われてくる．だが，*Couronnement de Louis*の用例（« Tout em poignant sa mace a destesee »）に同じ訳語を当てはめるのはかなり

の無理がある.「素早く槌矛を握ると…」と解するのはいかにもわざとらしいし，直前の行の« passe outre »を修飾しているという解釈はアクロバチックすぎる．一方，TLやGdfLexの与える“*zum Schlage erheben*”,“*brandir*”という訳語で，ContPerc^4 (15566-15568)の用例を解釈するのは不可能である．したがって，これは« destesee/desteser »の第四の用法と考えるほかなくなる．しかし，である．« plait »のように多用される語ならまだしも，五つの用例しか見つからない語が，四つもの用法を持つというのは，あまりに奇妙ではないだろうか．

筆者の結論を述べよう．Gdfは“*abaisser...*”を修正する必要はなかった．これは，武器を振り下ろすの意味であろう．そして，その語義で，Arch. JJ135の« il leva et destesa pour ferir »は完璧に理解できる．振り上げた武器を振り下ろし，振り下ろした武器で斬りつけるといった一連の動作をこの用例は表しているのである．また，武器を振り下ろせば，斬りつけることになるのは，ほとんど必然なので〈☆37〉，Arch. JJ140の« destesast et frapast »は類語を反復した表現だと理解できる．いずれの場合にも，« desteser »は武器を振りかぶった直後の，武器を振り下ろす瞬間，つまりは，蓄積されたエネルギーの解放の瞬間を表している．とするならば，ContPerc^{4}の第14414詩行にも同じことが当てはまるだろう．« quarriax (ne) destoise »は，弓が引き絞られた後に，矢が放たれる，その瞬間をとらえている．最初の二例と異なるのは，エネルギーの蓄積方法にすぎない．肝心なのは，エネルギー解放の動作なのである〈☆38〉．

以上のことから，« destesee »が実詞化した過去分詞女性形だと考えた場合，この語は，エネルギーが最大限に蓄積され，それが解放されるまさにその瞬間，つまりは，登場人物や武器が，攻撃を目前に控えた体勢や状態を捉えていると考えられるだろう．とするなら，ContPerc^{4}の第 15565 詩行は「すぐにも武器を振り下ろす体勢で＝即時攻撃可能な体勢で駆け寄る」と訳すことができるだろう．一方，我々の例は「即時攻撃可能な状態の槌矛を握って」と訳せる（「即時攻撃可能な状態で」も可能だろう）．

我々が知る用例では，« desteser »の周辺には，「 槌矛 (mace)，刺股 (fourchier)，棍棒 (massue)」といったかなり似通った武器が現れる．それゆえ，「振りかぶって」という解釈が適切に見えたのだが，Oswaldが発見した新たな用例は，Godefroyの最初の直感が，むしろ正しかったということを示唆している．そして，実を言えば，André Lanlyは，とうの昔に我々と同じ結論に達していたのである〈☆39〉．

> Le Turc s'éloigne à plus d'une portée d'arbalète ; tout en serrant sa masse prête à frapper il se précipite sur Guillaume, la gueule grande ouverte ; (André Lanly, *Couronnement de Louis*, 1983, p. 57.)

下記の通り，疑問符なしで« a destesee »の語義を記すことが許されるだろう．

Destesee: a — : *B* 1071, *à distance, d' un geste large.*	Destesee: a — : *B* 1071, ***tout prêt à frapper***

IV. 結論にかえて

下記は，Greimasの辞書をめぐる二つの対立する見解である．

> A. J. Greimasは自分の辞書を執筆するために，Gdfの『補遺』を参照しなかった．かの辞書は，その存在自体がフランス文献学を損なっているのである．

> 中世学者は自分の作業机の上に，A. J. Greimasの『古仏語辞典』を備えているだろう．その欠点——ただし，人はその欠点をとかく誇張するのだが——にも拘らず，この書物は入手が容易で，参照が簡便なため，非常に役に立ってくれる．他の辞書の助けを得て，情報を確認すれば済むだけのことである．

ぞっとするほどの手厳しい言葉遣いで，前者の見解を表明したのは，D.E.A.F.の現在の編集責任者 Frankwalt Möhrenである〈☆40〉．一方，後者がLepageその人の言葉であることは，読者はとっくにお見通しであろう〈☆41〉．

勝敗は一目瞭然である．とはいえ，筆者は，Möhrenが100パーセント正しく，Lepageが100パーセント間違っていると主張したいわけではない．4系列，9写本のテクストを丹念に書き写し，それらを適切に配置した上で，初めて語彙集の作成が可能となる．間違いが本論で指摘したものに留まらないのが事

実だとしても，Lepageの語彙集は，大変な労作であり，敬意をもって遇すべきものであろう．また，Greimasの辞書が多くの不正確な（あるいは不十分な）記述を含むのが本当だとしても，少なくとも，筆者は，この辞書がなければ古仏語の習得さえも思うに任せなかったに違いない．TLやGdfといった複数巻にわたる大判で重い辞書を検索するのは，肉体的にも精神的にも大変な負担となる．古仏語の初心者がいちいち未知の語を大型辞書で確認していたら，どれほど時間があっても足りないだろう．一方，GdfLexには用例が全くない．語義の羅列から，未知の単語のイメージをつかむのは，初心者にはきわめて難しい．その意味で，Greimasの辞書は，非常に役に立つのである．

だが，「学習辞書」の範囲を超えた用途を与えられた途端，この辞書が，甚大な害悪をもたらしかねないのも事実である〈☆42〉．前節では，その顕著な例をとりあげた．「中世学者は自分の作業机の上に，A. J. Greimasの『古仏語辞典』を備えて」いては“ならない”．それが本論の結論である．

だが，言うは易し，行うは難し．実際のところ，“業界標準”のGodefroyの記述を確認するだけでも，おそろしく手間がかかる．まず，この辞書自体が全八巻の本体（Gdf）と全三巻の補遺（GdfC）という二部構成になっている．そして，複数巻に分散したErrataを確認する必要もあり，さらに，本論でも触れた通り，記述の修正を確認するためにはGdfLexの参照も欠かせない．つまり，一つの単語のために，何冊もの書物の間を行き来しなければならないのである．しかも，Godefroyの十巻本を入手するのも容易なことではない．高価なだけでなく，絶版本で，いつでも手に入るわけでないからである．しかし，これらの困難が解消され，Godefroyが，「入手が容易で，参照が簡便」なものとなれば，Greimasの辞書はいずれ中世学者の机上から消え去るのではないだろうか．そういう思いを込め，筆者は，Gdf，GdfC，GdfLexを電子化し，無料配布することにした．Champion社の電子版とは異なり，GdfEdic，GdfCEdic，GdfLexEdicは，フル＝テキスト・バージョンでなく，画像を利用したものにすぎない．が，先にあげた全ての困難を解消する．すなわち，三つの辞書の同時検索が可能であり，全てのErrataを簡単に参照することができ，そして，検索用ソフトも含めて，インターネット上で無料でダウンロードできる〈☆43〉．

必要最小限，それがまさしくGdfである．テクスト校訂を行おうとする者，語彙集を作成しようとする者は，Gdfを参照できないのであれば，作

業プランに手をつけるべきではない.

上記もMöhrenの言葉である．GdfEdic，GdfCEdic，GdfLexEdicが，世界中の研究者に「必要最小限」へのアクセスを提供できるとしたら，作者としては，これ以上の喜びはない.

（和歌山大学准教授）

☆1 CourLouisLe : *Les Rédactions en vers du Couronnement de Louis : édition avec une introduction et des notes*, éd. par Yvan G. Lepage, Droz, coll. "T.L.F." , 1978. 略号は D.E.A.F. のもの．以下，同じ字体で表される略号についても同様である.
Cf. DEAFBiblEl : F. Möhren, Th. Städtler, St. Dörr, S. Tittel, M. Kiwitt, *Dictionnaire étymologique de l' ancien français : version chantier électronique du Complément bibliographique* (http ://www.deaf-page.de/deaff.htm)

☆2 CourLouisL[1] : *Le Couronnement de Louis : chanson de geste publiée d' après tous les manuscrits connus*, éd. par Ernest Langlois, Firmin Didot et Cie, coll. "S.A.T.F." , 1888.
上記には下の縮小版が存在し，André Lanly によって現代仏語訳もなされている.
CourLouisL[2] : *Le Couronnement de Louis : chanson de geste du XII*e *siècle*, éd. par Ernest Langlois, Honoré Champion, coll. "C.F.M.A." , 1925 (1ère éd. 1920).
Lanly, *Le Couronnement de Louis : chanson de geste du XII*e *siècle*, trad. par André Lanly, Honoré Champion, coll. "C.F.M.A. Traduction" , 1983.

☆3 Lachmann と Bédier の校訂法については，下記の書物が詳しく論じている.
Alfred Foulet, Mary Blakely Speer, *On Editing Old French texts*, The Regents Press of Kansas, 1979, Lawrence.
Yvan G. Lepage, *Guide de l' édition de textes en ancien français*, Honoré Champion, coll. "Moyen Âge – Outils de Synthèse" , 2001—ただし，P. Bourgain と F. Vielillard の厳しい批判も参照のこと (*Conseil pour l' édition des textes médiévaux – fascicule III : textes littéraires*, École nationale des chartes, 2002, pp. 227-228) .
原野昇，「写本とテクスト　本文の校訂」，『フランス中世の文学』，pp. 206-20.

☆4 ただし，複数のテクストを並列する刊行法 (édition synoptique) には，19世紀の先例があったことを忘れてはならない (*Les Enfances Vivien*, Alfred Nordfelt, Upsala, 1895).
また，書評の多くが指摘した，Lepage の方法論上の不徹底についても，確認を怠ってはならない．すなわち，1) A 系列のテクストとして提示されている詩行の少なからぬ部分が，実は他系列のテクストであること，2) D 系列のテクストの全てと，C 系列のテクストの一部が巻末に収録され，各系列テクストの比較に手間がかか

る結果となったこと，である．1）に関しては，本論でも具体例に触れる．2）に関しては，Lepage 自身が全ての写本のトランスクリプションを WEB 上に公開している．

http ://www.uottawa.ca/academic/ar ts/lfa/activites/textes/Couronnement/coltexte.htm

これは批判に対する誠実な返答と見なすべきであろう．本論執筆にあたっては，印刷本だけでなく，WEB 版も十分に活用したことを断っておく．

☆5　筆者が参照した書評は下記の通り．

N. Andrieux, Rom., 101 (1980), 402-409 ; G. S. Burgess, Z.F.S.L., 92 (1982), 65-66 ; H. H. Christmann, R.F., 92 (1980), 392-393 ; A. Fasso, C.C.M., 25 (1982), No.1, 67-69 ; L. Fontanella, S.F., 24 (1980), 529-530 ; G. Hasenohr, B.E.C., 140 (1982), 259 ; D. G. Hoggan, F.S., 35 (1981), 424 ; O. Jodogne, Scriptorium, 34 (1980), 181* ; H. S. Kay, R.Phil., 34 (1981), 274-279 ; L. Loefstedt, Vox Rom., 40 (1981), 235-237 ; A. de Mandach, B.H.R., 41 (1979), 659-661 ; G. Roques, Z.R.P., 95 (1979), 664-665 ; J. Subrenat, M.A., 86 (1980), 275-279 ; P. Verhuyck, R.B.P.H., 62 (1984), 643.

以上は，*Bulletin bibliographique de la Société Rencesvals* (BBSR) に登録された関連書評の全てである（雑誌名の略語も BBSR に従った）．

☆6　W. FOERSTER, *Wörterbuch zu Kristian von Troyes' sämtlichen Werken*, 2e éd. par H. Breuer, Halle (Niemeyer), 1933, 1ère éd. 1914.

☆7　Joseph BÉDIER, *La Chanson de Roland (Commentaires)*, L' édition d' Art H. Piazza,1927. ただし，巻末の語彙集は Lucien Foulet の手になる．Bédier の序文によれば，この語彙集のために，作品の全語彙を転記したカードは，2万5千枚におよんだ．

☆8　G. TILANDER, *Lexique du Roman de Renart*, Göteborg, Wettergren-Kerbers, 1924 — Paris (Champion), 1984.

☆9　*Le Roman de Thèbes publié d' après tous les manuscrits*, éd. par Léopold CONSTANS, Firmin-Didot et Cie, coll. "S.A.T.F." , 1890.

Benoît de Sainte-Maure, *Le Roman de Troie par Benoît de Sainte-Maure publié d' après tous les manuscrits connus*, éd. par Léopold CONSTANS, Firmin-Didot et Cie, coll. "S.A.T.F." , 1904-1912.

Les Deux rédactions en vers du Moniage Guillaume : chanson de geste du XIIe siècle, éd. par Wilhelm CLOETTA, Firmin-Didot et Cie, coll. "S.A.T.F." , 1906-1911.

Guillaume de Lorris, JEAN de Meun, *Le Roman de la Rose*, éd. par Ernest LANGLOIS, Firmin-Didot et Cie, coll. "S.A.T.F." , 1914-1924.

☆10　Frédéric GODEFROY, *Dictionnaire de l' ancienne langue française et de tous ses dialectes du IXe au XVe siècle*, t. I-VIII, Paris, 1881-1893.

☆11　Frédéric GODEFROY, *Dictionnaire de l' ancienne langue française et de tous ses dialectes du IXe au XVe siècle*, t. VIII-X (Compléments), Paris, 1895-1902.

☆12　J. BONNARD et A. SALMON, *Lexique de l' ancien français*, Paris, 1901.

☆13　Grandsaignes D' HAUTERIVE, *Dictionnaire d' ancien français : Moyen Âge et Renaissance*, Larousse, 1947.

☆14 Algridas Julien GREIMAS, *Dictionnaire de l' ancien français*, Larousse, 1979.

☆15 W. von WARTBURG, *Französisches etymologisches Wörterbuch*, Firtz Klopp Verlag G. m. b. H., Bonn,1928-2007.

☆16 K. BALDINGER, *Dictionnaire étymologique de l' ancien français*, [G-K], Niemeyer-Klincksieck, Tübingen-Paris, 1974-.

☆17 Adolf TOBLER, Erhard LOMMATZSCH et Hans Helmut CHRISTMANN, *Altfranzösisches Wörterbuch*, Stuttgart : Franz-Steiner-Verlag Wiesbaden, 1925-1995.

☆18 ページ数で語彙集の充実ぶりを比較するのは乱暴な話である．版形や文字の大きさにより一頁あたりの収録語彙数に大きな違いが生じるからである．だが，それを考慮しても，なお，次の比較は十分に意味を持つだろう（以下，作品名の後に叢書名 [“...” は省略]，出版年，作品詩行数を示す）.

たとえば，*Ami et Amile* (C.F.M.A., 1969, 3504) で5頁，*Charroi de Nîmes* (Klincksieck, 1978, 1485) で12頁，*Prise d' Orange* (Klincksieck, 1983, 1888) で16頁（それでも，当時においては，Klincksieck 版の語彙集は充実していると感じられた），*Aliscans* (C.F.M.A., 1990, 8185) で28頁である．さらに，CourLouisLe と同じ “T.L.F.” 叢書から出た *Chanson de Roland* (T.L.F., 1989, 4002) にいたっては，語彙集が存在しない（1971年のイタリア語第一版も同様）.

一方，近年では，*Moniage Guillaume* (C.F.M.A., 2003, 6862) の14頁は，極端に乏しい語彙集であって，*Hugues Capet* (C.F.M.A., 1997, 6360) は122頁，*Fierabras* (C.F.M.A., 2003, 6408) は101頁，*Siège de Barbastre* (C.F.M.A., 2000, 7692) は42頁，*Aymeri de Narbonne* (C.F.M.A., 2007, 4697) は101頁，“T.L.F.” 叢書では，*Jourdain de Blaye* (T.L.F., 1999, 23193) の175頁に及ぶ辞書と見まがうような語彙集もさることながら，*Chanson de Roland* (T.L.F., 2003, 4002) に77頁の語彙集が付されたことは，いっそう時代の変化をよく表しているだろう．もちろん，一方で，*Recherche sur la Chanson de Guillaume, étude accompagnée d' une édition* (Jeanne WATHELET-WILLEM, Les Belles Lettres, 1975) や *Parise la Duchesse, Chanson de geste du XIII^{e} siècle : édition et commentaires* (May PLOUZEAU, C.U.E.R. M.A., coll. “Senefiance”, 1986) といったような記念碑的労作が存在したことも忘れてはならない.

☆19 本論の扱う三つの問題のうち，前二者は，どの書評も指摘しない．最後の一つについては Gilles Roques のみが言及する.

☆20 « Supplément du glossaire de CourLouisLe »（ほぼ脱稿しているが，刊行未定である）.

☆21 Satoru SUZUKI, « Sur le mot plait », dans le *Vocabulaire de l' ancien français*, Keisuisha, Hiroshima (Japon), 2005. 本段落の記述はすべて鈴木氏の論文に基づく.

☆22 現代仏語訳するならば，Lanly の訳すように，*“Je ne veux point manquer le début de cette méchante affaire”* となる.

☆23 Jean FLORI, *Chevaliers et chevalerie au Moyen Âge*, Hachette, coll. “La vie quotidienne”, 1998, p. 106.

☆24 Philippe CONTAMINE, *Le Moyen Age : le roi, l' église, les grands, le peuple 481-1514*, Seuil, coll. “Histoire de la France politique”, 2002, p. 102.

☆25 現代仏語訳なら，*"Je veux assister dès le début à cette mauvaise assemblée"* (*Le Cycle de Guillaume d' Orange*, Livre de Poche, coll. "Lettres Gothiques" , 1996, p. 115 [v. 1508]) とするのが適切だろう．

☆26 CourLouisLe *A* 1951-1952 —— « asproié » を Langlois は *"preié"* と修正してしまっているが，ここでは，*"jm. zusetzen, jm. bedrängen"* (TL) の語義をもつ « asproier » をぜひとも温存すべきだろう．この語のもつ，執拗さ・強引さのイメージについては，FEW (25/1-473-b) も参照されたい．

☆27 むろん，こうした *B* 系列写本に基づいた修正は，校訂法の上からは大問題である．CourLouisLe が提供する校訂テクストの最大の問題点が，ここにあると言っても過言ではない．*A*, *B*, *C* 系列のテクストを平行して提示する方式をとりながら，*A* 系列のテクストとして，他の系列のテクストを提示するというのは，明らかに誤った選択である．注釈に逐一指摘してあるとしても，Hasenohr の指摘する通り，勘違いを引き起こすのは必定である．なによりも，「*A* 系列のテクスト」の定義そのものが揺らいでしまう (Lepage が「*A* 系列のテクスト」として提示したいのは，一体，写本のテクストなのか，それとも Lachmann 式の再建テクストなのか)．とはいえ，既に指摘した通り，Lepage は全写本のテクストを WEB 上で公開しており，この問題については解決済みだと考えて良い (ただし，*D* 152 の « fijugier » は « forjugier » の間違いである)．

☆28 Var. du *A4* del : du.

☆29 この書き方は少し Lepage の肩を持ち過ぎかもしれない．実のところ，第 936 詩行に関して Lepage が採用したのは，*B* 写本のテクストでさえない．*B* 写本の正確なテクストは « <u>Toute</u> la gorge li derompi <u>du</u> col » (*B2* : desrompi. 下線は小栗栖による) である．Lachmann 校訂法を採用した Langlois が底本の言語にあわせて単語の綴りを書き換えることは正当であるが，Lepage が同じことをするのは，方法論上の矛盾である．綴りを書き換えれば，読者は，当該テクストが別の写本からの借り物だということに一層気づきにくくなる．だが，もしかすると，Lepage は，*B* 写本のテクストではなく，Langlois のテクストを "修正" したにすぎないのかも知れない．

☆30 ならば，首の喉 (la gorge ... del col)」という連辞もあり得るのではないかと考える読者もあるかも知れない．たしかに，col という語が首よりも肩までをも含めた広い範囲を指し得るということを，岡田真知夫氏が，説得力をもって指摘している (岡田真知夫，「古仏語覚え書き [II]」，『人文学報』，東京都立大学人文学部，第377号，2006年，pp. 1-14)．したがって，全体と部分の関係で，「首の喉」という連辞を理解するのは，不可能ではない．しかし，違和感は拭えない．その理由は三つある．第一に，比較的定型文が多い武勲詩の中に，他の用例が見当たらないことがある．第二に，« col » と « gorge » が併存する若干の用例を確認した限りでは，両者は部分と全体の関係ではなく，並列の関係に置かれていることがある．

S' ele a biau col e gorge blanche, [RoseLLangl,13313]

qu' a po ne sont les voinnes rotes / del col et de la gorge totes ; [LancR, 4309-10]

『薔薇物語』の用例を，「首筋が美しく，喉が白い ...」と，篠田勝英氏が訳しているとおり（筑摩文庫，下，48頁），« col » と « gorge » は首の周辺の異なった部分を指していると考えるべきだろう．

最後に，何よりも，Langlois のような経験豊かな校訂者が，« gorge » を « guiche » に書き換えざるを得なかったことを，再度強調しておかねばならない．以上を考慮すれば，類例が見つかるまでは，「首の喉」を「洗練を欠いた」と評することは許されるだろう．

☆31 とはいえ，我々の用例に正確な語義と年代を与えるのは容易なことではない．TLFi (*Le Trésor de la langue française informatisé*, http ://atilf.atilf.fr/tlfi.htm) は，CourLouisLe の用例に「写本の年代（[date des mss]）」という但し書きを付した上で，13 世紀の年代を与えている．また，同じく TLFi は FEW が引用した1332年の用例にのみ，“*viscères, entrailles des animaux*” の語義を与えて，CourLouisLe の用例には，“*viscères (ici, d' un combattant frappé d' un coup d' épée)*” という語義を与えている．CourLouisLe の用例が孤立したものであり，他の類例を確認できない以上，上記のような慎重さが必要とされるのだろう．したがって，« issue » に「侮蔑的な意味合い」を見るのは，適切ではない可能性もある．

☆32 Var. du *B2* arbalestree : arbalestee ; geule : gueule.

☆33 Bibliographie Godefroy. Gdf の *Aim. de Narb* という出典表記についても当該データベースを参照されたい．

☆34 ただし，La Curne は Arch. JJ 135の方の用例には出典を付していない．こちらの出典は，Godefroy が自力で見つけ出したようである．

ついでながら，Arch. JJ 135の « un gros baston » は Lac では « un gros et pesant baston » となっている．また，Arch. JJ 140の « Bertant » は，Lac では « Bertaut » となっている（印刷不鮮明による見間違いでなければの話だが）．

☆35 GdfLex による，Gdf の記述の修正は往々にして見逃される．たとえば，FEW の Tēnsare では，« *desteser* v. a. “abaisser une arme qu' on brandissait” CourLouis, mfr. id. (1388), *deteser*, v. n. “décharger un coup” (1390) »(13/1-225-a)（該当分冊は1966年刊行）という記述が見られ，ATILF の *Dictionnaire du Moyen Français (1330-1500)* (DMF 2009) の Déteser の項目 (*Lexique complémentaire*, Hiltrud Gerner) には，« Abaisser (une arme dont on menaçait qqn) » という語義が見られる．

一方，C.F.M.A. 叢書の Langlois 第二版では « Desteser *levée ?* » となっている．これが，GdfLex(1901) の修正に基づくのか，TL をふまえたものなのかは，現時点では確認できていない．それを知るには，修正が初版（1920年）からなされていたのか，第二版（1925年）からのものなのか，TL の Desteser の項目を含む分冊の刊行年がいつなのかを知らねばならない．読者の教えを切に請う次第である．

☆36 ContPerc[4], Gerbert de Montreuil, *La Continuation de Perceval*, tome III, éd. Marguerite Oswald, Champion, coll. “C.F.M.A.” , 1975.

☆37 abaisser が「振り下ろす」という意味で用いられる実例と兼ねて，次の文章を引用しておこう．« “Pourquoi, dit Hlodwig à Raganher, as-tu déshonoré notre race en te

laissant enchaîner ? Il eût mieux valu mourir." Et il abaissa sa hache sur sa tête. » (*Histoire de Flandre, tome 1, Epoque féodale 792-1128*, p. 54, Joseph Marie Bruno, Constantin Kervyn de Lettenhove, Bruxelles, 1847).

☆38 これら三つの例で，« desteser » が，直接他動詞，間接他動詞，あるいは，自動詞として，まちまちな構文をとっているのは事実である．が，古仏語では，こうした事態は決して珍しい事ではない．Cf. Philippe MÉNARD, *Syntaxe* de l' ancien français, Bière, 1994, § 125.

☆39 だからといって，本論が無駄だというわけではない．それは，同じ箇所の新しい訳を読めば明らかである．« Le Turc s'éloigne de plus d' une portée d' arbalète, Tout en éperonnant il a brandi sa masse Et se dirige vers Guillaume la gueule ouverte ; » (*Le Cycle de Guillaume d' Orange*, Livre de Poche, 1996, p. 109).

☆40 Frankwalt MÖHREN, « Godefroy, une source encore valabale ? », in *Frédéric Godefroy*, École des chartes, 2003, p. 280.

☆41 Yvan G. LEPAGE, *Guide de l' édition de textes en ancien français*, Honoré Champion, 2001, p.130.

☆42 Van Daele の辞書にも同じことが当てはまるだろう．この辞書は，用例が一切収録されていないという欠点をもつものの，変化形を多数収録している点では，Greimas の辞書以上の利便性をもつ．メーリングリスト doc-et-doil の一部のメンバーの助けを得て，この辞書を電子化したのはそのためである．だが，配布にさいしては，これが学習辞書であることを明記し，その限界についても注意を促している．
Hilaire VAN DAELE, *Petit dictionnaire de l' ancien français*, Librairie Garnier Frères, 1939, Paris.
電子版 *VanDaele* は筆者のホームページ (http ://www.eonet.ne.jp/ ogurisu/) で入手できる．

☆43 http ://www.eonet.ne.jp/~ogurisu/2french/Intro.html
正直に告白しておこう．本当のところ，これらの電子辞書を，真っ先に必要としたのは，筆者自身である．本論は，長年 Greimas を手放せなかった筆者の反省文を兼ねているのである．また，大型辞書を引くためのガイドとして，Greimas や Van Daele の辞書が役立つ場合があることも，公平を期すために書き添えておこう．問題は，どの辞書を恒常的な拠り所にするかということであって，どの辞書を抹殺するかではない．
なお，本論の執筆に関して，上記電子辞書に加え，Peter Blumental 氏と Achim Stein 氏による TL の電子版 (TLEL) も活用した．後者については，筆者は改良版のインターフェースを考案し，両氏の許可のもと，データ変換用のソフト (TL_LexMaker) を上記サイトに公開している．あわせて告知しておく．

［追記］

Bulletin bibliographique de la Société Rencesvals, 第40号により，つい先日，下記の訃報に接した．
「Yvan Lepage（オタワ大学名誉教授、カナダ王立協会会員）が2008年5月22日に，65歳で

亡くなった.」

お会いする機会を永久に逸してしまった先生に，遅ればせながら，哀悼の意を表する.

LUTÈCE